

「安全・安心な農産物づくり」のために

農薬の適正使用と栽培履歴

●農薬を使用するときは必ずラベルを確認してから!!

農薬には使用量・濃度・使用時期・総使用回数・登録作目などが記載されており、これらを守ることが基本です。

また、農薬を散布するときは周辺作物に飛散（ドリフト）しないように十分注意します。隣に野菜圃場がある場合など、どうしても飛散してしまう恐れがあるときは野菜の作目を確認し、野菜にも登録がある農薬を使用するなど、注意します。農薬散布後は使用農薬・散布した量・回数など記録を残しましょう。記録を残すことで使用基準を守っているか証明になります。

●農薬使用の際の手順

- ① 農薬ラベルの確認 ② 実散布時（周辺作物の確認） ③ 栽培履歴（農薬の記帳）

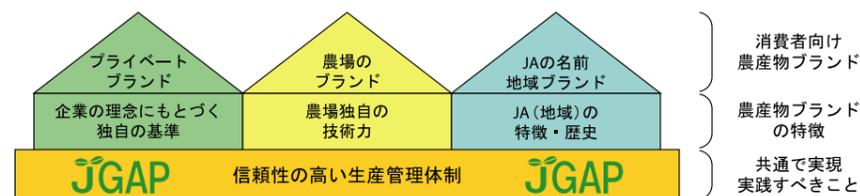


JGAP～信頼性の高い生産管理体制～

みなさんは「JGAP（ジェイギャップ）」という取り組みを耳にしたことはありますか？

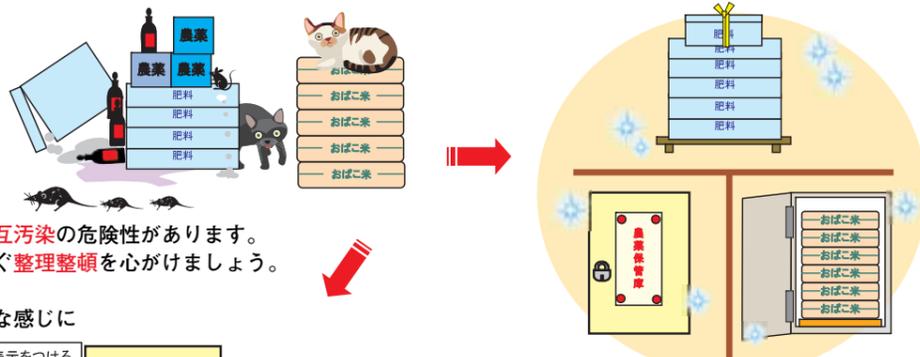
JGAPは様々な農産物ビジネスで食品事故などの問題を起さないために活用する農場運営の管理手法です。

- ポイント1 JGAPを導入することで、適切な農場管理が実現し、農場や生産者団体の ①食の安全性 ②環境保全度 ③労働安全度が向上します。更に農場の仕事が効率的になり、働きやすい職場になります。
- ポイント2 JGAPは「食品産業としての農業」を支える品質管理手法・経営管理手法です。様々な農産物ビジネスの共通の土台として使えるよう、JGAPの基準は作られています。



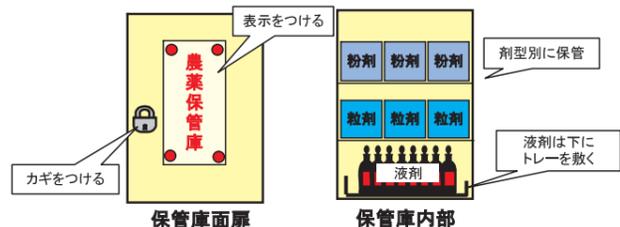
●取り組み例として

肥料と農薬と米（農産物）が同じところで保管されている、こんな作業場をどこかで見たことありませんか？



上の絵のようでは、**相互汚染**の危険性があります。しかも、不衛生！今すぐ**整理整頓**を心がけましょう。

農業保管庫は例えばこんな感じに



肥料・農薬・米（農産物）は**分けて**保管し、開封済みのものは、きちんと口を閉めましょう。

安全・安心な米作りは「美しい作業場」から「GAP」手法を組み合わせ、米作りのさらなる高みを目指しましょう。

発行/秋田おぼこ農業協同組合 監修/仙北地域振興局農林部農業振興普及課
仙北農業共済組合

天候に負けない強い稲を育てる為に水管理と圃場巡回の徹底をお願いします

～苗の生育に合わせ適期の田植えを実践しましょう～

東北地方の天候予報 仙台管区气象台 平成23年5月13日発表

5月13日から6月13日までの天候見通し

●予想される向こう1ヶ月の天候

向こう1ヶ月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は右図の通りです。天気は数日の周期で変わってでしょう。平年に比べ、晴れの日が多い見込みです。降水量は少なく、日照時間は多いと予想されています。個別の気温は、1週目は平年並の確率50%で、3～4週目は、平年並または高い確率が40%です。

気 温 (%)		
低い (30%)	平年並 (40%)	高い (30%)
降 水 量 (%)		
少ない (40%)	平年並 (40%)	多い (20%)
日 照 時 間 (%)		
少ない (20%)	平年並 (40%)	多い (40%)

〈予報の対象期間〉

- 1 週 目：5月14日(土)～5月20日(金)
3～4 週目：5月28日(土)～6月10日(金)

これまでの生育概況と農作業の進捗状況、対策について

- 苗の生育は、播種が平年より遅かったこと、4月が全般的に低温で経過したことから草丈が短く、葉令が遅れている傾向にあります。また、出芽揃いはやや悪いものの、障害等の発生は平年並と見られます。
- 播種作業盛期は4月25日、終期は5月1日であり、平年よりも2日遅い状況です。耕起作業についても消雪が遅れたことと天候不順により6日程度遅れています。
- 田植え作業の遅れが懸念される為、以下の対策を行いましょう。
 - ① 田植え予定時期が延びる場合は、やや低めの温度管理や追肥の回数を増やし、苗の老化を防ぎます。
 - ② 圃場が柔らかい状態で耕起をした場合は、過度の代かきに注意しましょう。

田植え作業の留意点

1. 温暖な日の田植え作業で初期茎数を確保しましょう
2. 田植え作業を行う前に田植機の点検と設定を確認!!



項目	設定	留意点
基肥量	地域基準値	側条施肥をする場合は田植機の側条施肥機を点検しましょう。
栽植密度	60～70株/坪	茎数がとれにくい場合は70株/坪を目安にしましょう。
植付本数	4～5本/株：稚苗 3～4本/株：中苗	生育のばらつきを少なくするために植付本数を守りましょう。
植付深さ	2～3cm程度	植付が深すぎると茎数が増えにくくなります。初期茎数を確保するために稚苗で2cm、中苗で2.5cm程度の植付深さを守りましょう。

田植えのポイントと水管理 ～適切な水管理で活着・分けつの促進をしましょう～

適期の田植えで生育良好

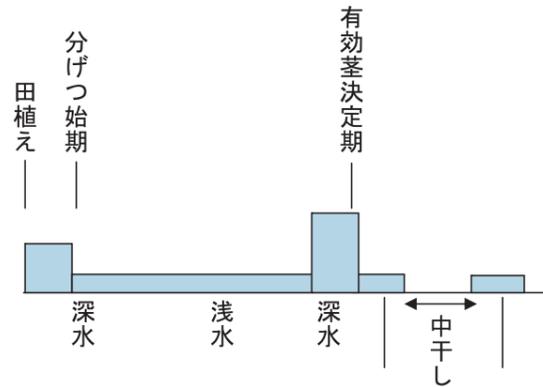
・田植えは、日平均気温で稚苗13℃、中苗で14℃以上の日とし、最高気温が15℃を下回る日は田植えは行わないよう注意してください。

水管理で早めの活着

・苗は気温と水温が高いほど活着が良くなります。
田植え後は水温を上げるため、4 cm程度の深水管理をし、苗の活着を促進させましょう。

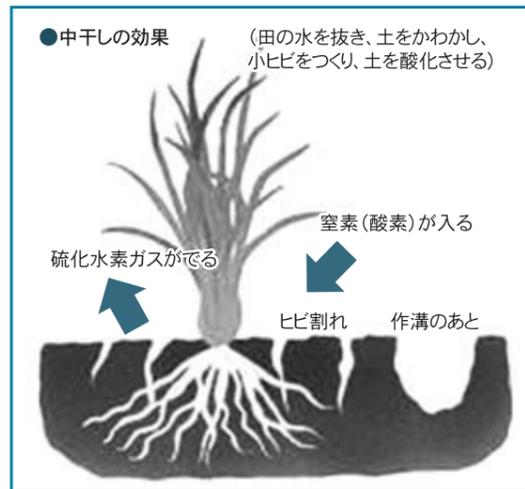
活着後の水管理で分けつ促進

・通常、苗は田植え後4～5日で活着します。
・除草剤を散布するときは成分の拡散性を高めるため、水深5 cm以上を保ちましょう。
・分けつ発生に適する水温は日平均23～25℃で、日中と夜間の水温の日較差が大きいことが重要です。
・日中の気温が15℃以上の日は浅水、低温時には深水とし、水温・地温の上昇努め、分けつの促進を図りましょう。



有効茎歩合をアップさせる

- 6月下旬になると強勢茎が出そろうとともに、弱小分けつが発生する時期にあたります。
- ・茎を太くし、穂揃いを良くするため、イネの葉令8.0～8.5葉期（6月20日～25日頃）に深水処理をしましょう。
- ・深水処理は15cmの水深を保つことが出来る圃場で行います。
- ・茎数が少ない場合は通常の水管理を行います。



稲の生育をこまめにチェック

チェック項目	チェック
① 田植え時の気温は最高気温が15℃以下を下回ってはいませんか？	✓
② 田植え後の水深は4 cmを保っていますか？	✓
③ 除草剤の使用は適正に行っていますか？	✓
④ 深水にしすぎて苗が水没していませんか？	✓
⑤ 苗の活着後は浅水にしていますか？	✓
⑥ かん水は早朝に行っていますか？	✓
⑦ 中干し前に溝切りはしていますか？	✓

葉いもち予防対策 ～早期発見・早期防除が鉄則！～

オリゼメート粒剤の散布適期と留意点

- ① オリゼメート粒剤は6月15日頃（12日～19日）に散布しましょう。
- ② 発生前の散布で予防効果を高めましょう。
- ③ 効果は30日程度持続します。
- ④ 止葉や穂には効果はありませんので注意願います。
- ⑤ 育苗期の箱処理剤体系や側条施用体系を実施していない方は、必ずオリゼメート粒剤を散布します。



いもち

圃場内でいもち病発生を確認したら

持ち込み病斑や圃場の余り苗等からの伝染を早期に発見した場合は、速やかな防除対応が必要です。

- ① 箱処理剤または側条施用剤を使用していない場合
病斑を発見した場合は、**オリゼメート粒剤と予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤）の茎葉散布を併用**し、その後必要に応じてラブサイド剤を追加散布します。
- ② 箱処理剤または側条施用剤を使用した場合
持ち込みによる発病圃場では防除効果が十分に発揮されないため、病斑を発見した時には直ちに**予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤）**を茎葉散布します。

残った雑草は中期剤で根絶!! ～取りこぼした雑草は生育の阻害や害虫のすみ処になります!!～

区分	除草剤名	使用時期	使用量(10a当)	使用回数	収穫前日数
中期剤	マメットSM1 粒剤	移植後20～30日 (但し、ノビエ3.5葉期まで)	1 kg	1回	—
	フォローアップ1 粒剤	移植後25日～ノビエ5葉期まで	1 kg	1回	収穫60日前まで
	クリンチャーバスME液剤 ※1	移植後15日～ノビエ5葉期まで	1,000cc	2回以内	収穫50日前まで
	バサグラン粒剤 ※2	移植後15日～40日まで	3 kg	2回以内	収穫60日前まで
	バサグラン液剤 ※3	移植後15日～50日まで	500～700ml	2回以内	収穫50日前まで
ヒエ専用	ヒエクリーンバサグラン粒剤 ※4	移植後15日～ノビエ4葉期まで	3 kg	1回以内	収穫60日前まで
	クリンチャー1 粒剤	移植後7日～ノビエ4葉期まで	1 kg	2回以内	収穫30日前まで
	クリンチャーEW ※5	移植後20日～ノビエ6葉期まで	100ml	2回以内	
	ヒエクリーン1 粒剤	移植後15日～35日	1 kg	1回以内	収穫45日前まで

○使用上の注意

- ※1 クリンチャーバスME液剤（水70～100%で希釈、落水状態で散布、展着剤不要）
- ※2 バサグラン粒剤（落水状態又はヒタヒタ浅水状態で散布）
- ※3 バサグラン液剤（水70～100%で希釈、落水状態又はヒタヒタ浅水状態で散布）
- ※4 ヒエクリーンバサグラン粒剤（ごく浅い湛水で散布）
- ※5 クリンチャーEW（水70～100%で希釈、展着剤を使用して落水状態で散布）